

kaminorippo.org

付録5a：安息日と教会に行く日、2つの異なるもの

このページは、第4の戒め「安息日」に関するシリーズの一部です。

1. 付録5a：安息日と教会に行く日、2つの異なるもの（現在のページです）。
2. 付録5b：現代において安息日を守る方法
3. 付録5c：日常生活における安息日の原則の適用
4. 付録5d：安息日の食事 — 実践的な指針
5. 付録5e：安息日の交通手段
6. 付録5f：安息日におけるテクノロジーと娯楽
7. 付録5g：仕事と安息日 — 現実世界の課題への対処

教会に行くのは何曜日ですか

礼拝の日を特定する戒めはありません

この学びを始めるにあたり、まず要点を明らかにしましょう。キリスト教徒がどの日に教会に行くべきかを示す神の戒めはありませんが、どの日に休むべきかを定める戒めはあります。

キリスト教徒は、ペンテコステ派、バプテスト派、カトリック、長老派、その他どの教派に属し、日曜日や他の日に礼拝や聖書の学びに参加していても、それによって神が定められた日、すなわち7日目に休む義務を免れるわけではありません。

礼拝はどの日に行ってもかまいません

神は、この地上にいるご自分の子らがどの日にご自分を礼拝すべきかを、一度も定めておられません。土曜日とも、日曜日とも、月曜日、火曜日などとも定めておられないのです。

キリスト教徒が祈り、賛美、学びを通して神を礼拝したいと願うなら、1人でも、家族とでも、集団でも、どの日にでもそうすることができます。兄弟たちと集まって神を礼拝する日は、第4の戒めとは何の関係もなく、父、子、聖霊である神が与えられた他のどの戒めとも関係がありません。

7日目についての戒め

中心にあるのは礼拝ではなく休息です

もし神が本当に、ご自分の子らに安息日（または日曜日）に幕屋、神殿、あるいは教会へ行くことを望んでおられたのなら、当然、この重要な点を戒めの中で述べられたはずです。

しかし、以下で見るように、そのようなことは一度もありませんでした。戒めが述べているのは、神ご自身が聖別された日に、私たちが働いてはならず、誰にも、動物にさえも、働くことを強いてはならないということだけです。

神はなぜ7日目を取り分けられたのですか

神は、創造の週をはじめとして、聖書の数多くの箇所で、安息日を聖なる日（区別され、聖別された日）として述べておられます。「神は7日目に、ご自分がなさった業を完成し、その日には、なさったすべての業をやめて休まれた[ヘブライ語שבת（Shabbat）動詞、やめる、休む、中止する]。神は7日目を祝福し、これを聖別された[ヘブライ語קדוש（kadosh）形容詞、聖なる、聖別された、取り分けられた]。その日に、ご自分が創造し、造られたすべての業をやめて休まれたからである」（創世記2章2–3節）。

安息日に初めて言及するこの箇所で、神は、後にさらに詳しく私たちに与えられる戒めの土台を据えておられます。その内容は次のとおりです。

1. 創造主は、この日を、それに先立つ6日間（日曜日、月曜日、火曜日など）から区別されました。

2. 神はこの日に休まれました。神は霊ですから（ヨハネによる福音書4章24節）、創造主には休息の必要がないことを、私たちはもちろん知っています。それでも神は、地上のご自分の子らに7日目に何をしてほしいと望んでおられるかを私たちに理解させるために、神学で擬人法と呼ばれる、人間に即したこの表現を用いられました。それは休むこと、ヘブライ語でShabbatです。



神は7日目までに、それまでなさっていた業を終えられた。それで7日目には、すべての業をやめて休まれた。そして神は7日目を祝福し、これを聖なる日とされた。その日に、それまでなさっていた創造のすべての業をやめて休まれたからである。

安息日と罪

7日目が他の日々から聖別されたこと（または区別されたこと）が、人類の歴史のこれほど早い時期に起きたという事実には、重要な意味があります。創造主が、私たちに特にこの日に休んでほしいと望んでおられることは、罪とは結びついていないと明らかになるからです。その時、地上にはまだ罪が存在していませんでした。このことは、天においても新しい地においても、私たちが引き続き7日目に休むことを示しています。

安息日とユダヤ教

また、これはユダヤ教の伝統ではないことにも注目できます。ユダヤ人の祖となったアブラハムが登場するのは、それから数世紀も後のことだからです。むしろ、神は地上のご自分の真の子らに、この日にご自身がどのように行動されたかを示し、私たちが父に倣えるようにしておられるのです。それは、イエスがなさったのと同じことです。*「まことに、まことに、あなたたちに言う。子は、自分では何もすることができず、父がしておられるのを見ることのほかは、何もすることができない。父がなさることは何でも、子も同じようにするからである」（ヨハネによる福音書5章19節）*。

創世記における7日目

以上が創世記での言及です。この箇所は、創造主が7日目を他のすべての日から区別され、この日が休息の日であることを、これ以上ないほど明確にしています。

聖書のこの時点まで、主は、前日に創造された人間が7日目に何をすべきかについて、具体的には述べておられませんでした。選ばれた民が約束の地への旅を始めて初めて、神は7日目についての詳しい指示を与えられました。

異教の地で奴隷として400年間暮らした後、選ばれた民には、7日目について明確にすることが必要でした。そこで神ご自身が石の板に次のように記されました。これらの命令を与えたのは人間ではなく神であることを、誰もが理解できるようにするためです。

第4の戒めの全文

神が7日目について記されたことを、全文で見てみましょう。
「安息日[ヘブライ語שבת（Shabbat）動詞、やめる、休む、中止する]を心に留め、これを聖別しなさい[ヘブライ語קדש（kadesh）動詞、聖別する、聖なるものとしてささげる]。6日間は労働し、あなたのすべての仕事[ヘブライ語מלאכה（m'larrá）n.d.仕事、職業]をしなさい。しかし、7日目[ヘブライ語ויום השביעי（uma shivi-i）7日目]は、あなたの神、主のための休息である。その日には、あなたも、あなたの息子も、あなたの娘も、あなたの男の僕も、あなたの女の僕も、あなたの動物も、あなたの門の内にいる寄留者も、いかなる仕事もしてはならない。主は6日間で天と地と海と、その中のすべてのものを造り、7日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖別された」（出エジプト記20章8–11節）。

なぜ戒めは「心に留める」という動詞で始まるのですか

神が戒めを「心に留める」[ヘブライ語זכר（zakar）動詞、覚えている、思い起こす]という動詞で始めておられることから、7日目に休むことは、ご自分の民にとって新しいことではなかったと分かります。

彼らはエジプトで奴隷の身であったため、頻繁に、あるいは正しい仕方でそうすることができませんでした。また、これは民に与えられた10の戒めの中でも、群を抜いて詳しい戒めであり、戒めを記した聖書の節の3分の1を占めていることにも注目してください。

戒めの中心点

出エジプト記のこの箇所については、長く論じることもできます。しかし、ここでは、この学びの目的に焦点を絞りたいと思います。それは、第4の戒めの中で、主は、神を礼拝することや、ある場所に集まって歌い、祈り、聖書を学ぶことに関して、何も述べておられないと示すことです。

神が強調されたのは、ご自分が聖別し、休息の日として取り分けられたのは、この日、すなわち7日目であることを、私たちが心に留めなければならないということです。

7日目に休まなければならないという神の命令は非常に重大であるため、神はその戒めを、私たちの訪問者（外国人）、従業員（僕）、さらには動物にまで及ぼされました。こうして、この日には世俗の仕事は一切許されていないことを、極めて明確にされたのです。

安息日における神の業、人間の基本的な必要、親切な行い

安息日についてのイエスの教え

イエスは私たちの間におられた時、地上における神の業に関わる行為（ヨハネによる福音書5章17節）、食べることなど、人間の基本的な必要に関わる行為（マタイによる福音書12章1節）、他の人への親切な行い（ヨハネによる福音書7章23節）は、第4の戒めを破ることなく7日目に行うことができ、また行わなければならないことを明確にされました。

休息し、神に喜びを見いだすこと

7日目に、神の子は自分の仕事を休み、そうすることで天の父に倣います。また、神を礼拝し、神の律法を喜びとします。それは7日目だけでなく、週のどの日も同じです。

神の子は、父が自分に教えてくださったすべてのことに従うのを愛し、喜びとします。
「いかに幸いなことか、悪しき者の助言に従って歩まず、罪人の道に立たず、嘲る者の席に座らず、主の律法を喜びとし、その律法を昼も夜も思い巡らす人は」（詩編1編1–2節、併せて参照：詩編40編9節（40編8節）、112編1節、119編11、35、48、72、92節、ヨブ記23章12節、エレミヤ書15章16節、ルカによる福音書2章37節、ヨハネの手紙一5章3節）。

イザヤ書58章13–14節の約束

神は預言者イザヤをご自分の代弁者として用い、安息日を休息の日として守ることでご自分に従う者たちに、聖書の中でも最も美しい約束の1つを与えられました。
「もしあなたが足をとどめて安息日を汚さず、わたしの聖なる日に自分の意志を行わず、安息日を喜び、主の聖なる栄光ある日と呼び、自分の道を行かず、自分の意志を求めず、むなしい言葉を語らずに、その日を尊ぶなら、そのとき、あなたは主に喜びを見いだし、わたしはあなたを地の高い所に乗せ、あなたの父ヤコブの受け継いだものであなたを養う。主の口が語ったからである」（イザヤ書58章13–14節）。

安息日の祝福は異邦人のためでもあります

神の祝福を求める人々には、7日目に結びついた、美しい特別な約束が用意されています。主は同じ預言者に対してさらに踏み込み、安息日の祝福はユダヤ人だけに限られないことを明確にされました。

安息日を守る異邦人への神の約束

*「また、主に仕え、主の名を愛し、その僕となるために主に連なる**異邦人**[נֵכָר nekhar（よそから来た者、外国人、ユダヤ人ではない者）]、安息日を汚さずに**守り**、**わたしの契約を受け入れる**すべての者を、わたしはわたしの聖なる山に連れて行き、わたしの祈りの家で喜ばせる。彼らの焼き尽くす献げ物といけにえは、わたしの祭壇の上で受け入れられる。わたしの家は、すべての民のための祈りの家と呼ばれるからである」*（イザヤ書56章6–7節）。

土曜日と教会の活動

従順なキリスト教徒は、メシアニック・ジューであっても異邦人であっても、7日目に休みます。主が休むように指示されたのはこの日であって、他の日ではないからです。

あなたが集団で自分の神と交わりたい、あるいはキリストにある兄弟姉妹と共に神を礼拝したいと願うなら、機会がある時にはいつでもそうすることができます。その機会は通常、日曜日にあり、また、多くの教会が祈り、教理、癒やし、その他の集会を行う水曜日や木曜日にもあります。

土曜日に会堂へ行くこと

聖書時代のユダヤ人も、現代の正統派ユダヤ人も、土曜日に会堂へ行きます。それは、第4の戒めに従ってこの日には働かないため、明らかにそのほうが都合がよいからです。

イエスと安息日

イエスご自身も、土曜日には定期的に神殿へ行かれました。しかし、7日目に神殿へ行くのはそれが第4の戒めの一部だからだと、ほのめかされたことは一度もありません。実際、それは戒めの一部ではないからです。



西暦70年にローマ人によって破壊される前のエルサレム神殿の模型です。イエスは定期的に神殿や会堂へ行き、そこで教えを説かれました。

イエスは安息日に魂の救いのために働かれました

イエスは週7日、父の業を成し遂げるために忙しく働いておられました。
イエスはこう言われました。*「わたしの食べ物は、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである」*（ヨハネによる福音書4章34節）。

また、こうも記されています。
「しかし、イエスは彼らにお答えになった。『わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働いている』」（ヨハネによる福音書5章17節）。

安息日には、神の国の知らせを聞く必要のある人々が最も大勢神殿にいることが、しばしばありました。
「イエスはご自分が育ったナザレに行き、安息日には、いつものように会堂に入られた。そして朗読しようと立ち上がられた」（ルカによる福音書4章16節）。

イエスの教えは、言葉と模範を通して示されます

キリストの真の弟子は、あらゆる面でキリストの生き方を模範とします。イエスは、私たちがご自分を愛するなら、父と子に従うようになるとはっきり示されました。これは弱い者に対する要求ではなく、神の国にしっかりと目を向け、永遠の命を得るために必要なことは何でも行う覚悟のある者に対する要求です。たとえそれが、友人、教会、家族からの反対を引き起こすとしてもです。髪と髭、tzitzit、割礼、安息日、そして禁じられた肉に関する戒めは、キリスト教界のほぼ全体によって無視されています。そして、大勢の人々に従うことを拒む者は、イエスが私たちに告げられたとおり、必ず迫害されます。神への従順には勇気が必要ですが、その報いは永遠です。